



中村俊定文庫
文庫 18
284
2



淡く秋白集秋之部

臨柳—まゝふ桐の和河をい

殊云

意教は版あそなうは女帝を

セク

かゝ味や松をあまは星一程

麻の耳をいひて立る天川

びりれ反同のや修学をあまの川

類う小京海と云ふ

此夕あそをいひの祇園橋



らう勢ハ其のまゝく一首は皮乃川
薑ハナカシ せん せきくちれ橋も一夜の南
作も余さかしの河系石

言渡舟中吟

まよ及ん東竹田の七川弁戸

淀川下り船

星をさよみ水をゆきくや船はひ
るなりハはさぬるへ——星の棧
硯の世空け牛より又向の那
星二輪吟や川風海をくへ

橋照るやさよた静き世星二人
かめくくと星又くおききの志づくくおぬ

壬七夕の吟

勢ハ音りくや情るや居乃又

七月の末去月也二本本の鳥園小おをぬ
探歌 林糸屋五月

初月や夜ハる水色や——輕山

題番椒

冷なりくく玉眼きりぬきくくの船
水園小おぬ
凡のまをわくく

笛持てる人七 赤糸く 娘乃風

七月十五日

帰んまゝの籍をたぐく 魂出久

魂出久

来ぬ人を知きいし世に魂まらじ

中え

孤弱二美六ふ日

ふふと吾も親少母家の月夜か

魂柳戸秋津鳴板の州一柱い

瓜をさしき馬と夕へのそく先か

中え

刺藪の垣しきあきの神みま

寛保二年七月十五日 上京船中吟

六十九 新名月名 又月夜

をさしき

京の秋よりをせしハ荒井 乃帆

七月十六夜 鴨川の舟小舟にてハ荒井と云あり

又字はく志をくく月のさそらうふ

編書

いふはまやハ嵐乃の風くるま借

編書あふやうたをるま本州一ハ

海嶽あり 文章を略す

いふはまのまあまきく皆よはなを

久世の又殊き

或る位或ハ 富貴人 壽の海

晴辰船中吟

又座一 月の痛乃 祀と山まら

まのち老の事緒と雪て

入の今 六たつが うばくう

七月廿三日京所りんと町る後の時

有る遠一 雨れち春の 新日川

探訪 山家琴

沼買乃 来忽おま 人坂乃月

日一室影 録

うさついと月夜は 長き 時さち

一と秋 ねうけて 奥へ 竹 梓 あり日

秋の 蝉一 北斗一 おお 一 ところか

来れ けさ 一 筆 一 雅 一 善 一 深 一 山 一 秋

松皮 百合 秋の 今と ぬく 一 一 ぬく 一 予と 一 一 一 一 一 一 一

適眼と 萩 風 なく 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

山 障乃 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

秋の 是 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

鶉 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

題 山 家

小豆摺る家よりまらるや麻の葉
蛇牛仙果とねきねぬりこりね
うねりこの又寸小豆るや 花の葉

菖蒲君一句と作らう梅下の新類送音歌と云

風蘭の下り ちりまら白しこの事

八朔之吟

梅くや今ね吹く月 秋二月

このぬ乃志ぬれた枝のたれとが

八月二日ぬ乃ち小親曾大主と桑とを摘み
着いた後だく漬あふ向いの尻はぬれぬ
はとぬく袖ぬれぬ

あふけぬきり右ねあれ玉うハ

竹の節の毛も立と送る歌
ぬ工ハ平陽の枝ハなり

死んくまよふ麻もまろ人筒の中

越州君所嫁ち忌草

月七より 病り思ねおとと山

野分

鶴居を吹消はぬ乃何う一が

武陽福居の板麻毛うちぬる歌ハ

をくす清とろあや 秋乃篇

夏保え幸山崎小橋ふ

船川の玉れ結きハむ尾ふこの那

まめ庭を東林藤ふとら時文章とま交小略に

臨くハ如日ノ終ヤ止キ秋黃鶉泣
日新文移小移リ終ハ

臨くハ如日ノ終ヤ止キ秋黃鶉泣
本日と別の一字観をへ一附と云文章一と略之

述懐

穂も出以中少と遠さ及城のま

糸所ト右の表と受補ホリして

柳子舞乃か〜〜〜尾花水

名ろ

若月やふもぬまも 浮こか

肩の香尸杖はく〜〜〜子小泣利

若ろや人ろ〜〜〜先々 ありま月

病夜

お月のかの近白乃君と月見の事

或ハ晴或ハ曇

新小佛一の園を月見の事

吾折略あり四面清き水

名ろの晴月一 伏見や陰ろつ

雨少き水ハ

月此夜降一 小祓糸ハなろりきり

一と巻石山原氏の回小持ぬ

死あてぬ日なれろり月れ少やんが

日ナハ夜ハ言記書あり湖二の氣と
馳をまろ文移のとありろりとみ出ぬ

名づくや来き 八月十六夜

二時一芥

例如き之なり 名や橋の

森雨去きうがをい

雨河川く先婦の中これ月見え

橋小清水友を橋上小
権宗して東師の方とよ

晴く月之をこれ山をたつ

名月や橋是く名なり来か

降る玉もく人晴る来月見え

く月満つ大乃く立踏り

右より橋橋

くあくや倚る小眠流物相

馬て行 舞もく人月の華

日小桂 男はくくまうみ山

名月中国の被戒を悔い

新孫は山をく中岩を橋の

鳴く月 神は編を括れ月

雨より流る来河をよ

像月や頻く 粟生の光明寺

日

けお好くはりる 秋月や見え

名月中も少くも吹人如く 標乃貝

事りと性と多き月と月と中澄し舟

名月中も 蔭なる寺村尋人

和名南あき

婿し さとらき青返舟中少くも若登

言津新地別當かき松府赤山を吹れ
又文字と以奈枝と別け

舟し いさらとも月乃花しし山

燕の晋子云 呉楚東南拆山更出り
一句ハ一字小云

コト云

新を舟小がしし 踊く人月をさる

言ぬ清きなりとそいかにさる

之又の夜 文ましく 柳をさる川少

さるあきは

々 舟のうら 新まる 橋を破る金

まろ人眉の字と賜り多時

十と舟中 柳小頻昇 舟山を眉

梅りくた い高き 楊家たる始のま

ま紙すけ 屏よく 言し 美語は

大まの母よおれらる小

らとれてハ 忘るし 朽人神を柿

月磨り始の身まうらる時

家を射し 一夜も多き 舟の風

彦奥小燈小止名

曉中一火は中よりさうりくを

中は小燈の火

一日乃き人をもととく風の中

大徳寺に彦陽小燈のとき東より雨別送るは

雨乃中より小衣の破れ相 雪江

破きく終るころはもほひ風を相

偶成

待くく待をさるり乃神言うる

享保十七年八月廿九日大雨御車ひつりたきあり

月形よおえうハ天乃さうりく

彦中書

清唱や瓶がたきくるるを後

あまのつらき

盗人の涙がたきく人州のあ

小燈又六株傍むらりもさうり

おちりく暗なきとあ乃りハハ

彦陽

花とくは傾城とと乃終の袖

乃よるり神乃あぬりハハ

彦陽彦陽

彦陽彦陽

皆冥ふき掛ハお葉のやとく

さくとく女使もむりハハ

世界 雲の宿をとりし 菊とくね
人下 竹ノ葉をむしりの葉の籠

放下

竿子 神海りし中 菊もては空

はて秋家 匠おしむ

菊も日 節くや 墨北 流路一海

園路五十のり

七十乃 只今 ちち菊乃を能

探頭 垣の秋

春小と 仙を 能くぬ 菊もては風か

胡小夕と 菊のし 菊とをいけて 四月逝ぬ

何 危ぬ 風子 かり 菊の葉の花

探頭 寄葉巻

偷むふよ 尻り かり 菊乃を

九月十一之秋

言ぬ月ぬく 十一之秋ハ 候時なり 秋ハ

おそ 終へ 八月 菊の 朝の月

久世の 漢幸あり

菊 菊ハこれ 菊也 後乃月

菊 月を 日 廿連 言 菊もては 菊のり

はて秋半時

子 里を 一 日 菊のり 運 後乃月

十一之秋ハ 菊のり 候時

十一之秋と 古俗の介ハ

菊 菊のり 菊のり 菊のり 菊のり

十日日安洞亭小持ぬ
十一日秋の夜の忠通作らう

古人は去らぬ一宿夢秋の月

九月小の仙とんころい

てまぢる度田の多うの日記

仙や 十八日 暮ら ころく 大詠と

善言舎の日記に 迎ふ 暮らと 秋の月小

風月と新しむ 九月十日 死と ぶ幸と 文三刊

枝へ 吹流と 風ぬ 一 相一 玉

又

空のくや 吐は 秋の風

善秋

見て 啼 一 麻の上がく 一 十日月

来ぬ 麻を 一 山や 風乃 名 糸の ね

おま

はつ ひともし 暮ら 一 宿う 勢 神 ぬ 糸

善保 秋日の 吟 怪人集 入

入の 風 一 怒 ねと みる 一 け

清々發句集冬之部

小去之卷

あゝあゝや日乃 詠きあみとく
葉の花れ月一の林やふの中

奥洞の藤貴亭小持ふ初冬の文章を略す

あいろをこわしそ 朝乃時ふのあ
冬 独活の窟ふ阿せふあふうね

偶成

蓮小ね乃 音をそふあや風の響
徐歩

空高く暮るる——あふ枯草か

東山進帳 幸天巻
十月果るる——

秋小紙——雨乃ちうい秋一の庭

巻懐

宇宙もろいゆき——秋娘木のまふか

力なく花えたる麻のまきさこの雨

蜀葵小紙

塩漬の花まろ宿まき野咲くうら

時雨

ぬきむら——麻と色山や村——

いり少人志う秋の路乃う水柳

松府の巻末を

原書や——雨まぬいふ原——き小紙——

きく水く——雨をぬ山や——夕日

秋——水まき——秋の鏡うら

言は葉店まき

響き——いむ——うみ海の志う秋をん

日の花を折ってい原は——水か

一とくき玉の——月乃帆うけ

唄や時雨の——れ阿——ひる

——うら秋の——原中 桔槔——

一時雨 暈き曇る 雨 又日雨

右河文字の如く翻別して小とほし

日既半、宿くぬ後乃 何雨か

右は向は先年「回の花」を以て「おぼろ」と呼ぶと
よふ物と「時の晴る夜」といふあやふく又降りと
くれぬ風骨であるかと云ふと却破して「おぼろ」とも

祇林近野実告

必中阿く人 祇ぬり留の神ー丸

きこいこと

科 てつや 肩子獨のど川志登連

明くも憐んー多極のまどあるまうく

河ー久祇陰ヒソカより飛乃 あまーつ花

右は先年早稲ふ「州」のふまも祇ふ明小く

此の書の字とハ漏句（る）其の飛極みと續てきて
無ぬー「極」の字と云ふ（ハ）陰の字と云ふ（ハ）用ひては
可極活の字調ふ於ふにまゝな 此は白雲龍の字と云ふ大食
ぶみり云々「茶市」の切と後入の「まふ」は「作る」と
「作る」といふ云々「作る」といふ「まふ」は「作る」と
ちてハる立り

高林君詩別題をてし其

来くハ深居り 予ハ落居ーく極か

雨ふ似くいゝさ由文事ーいゝ極

夕照るや生 弱 兵庫ー山二時雨

水時大君 渚口切ふめさく

さくくくく一戸 明くーく火乃 赤世界

病夜

車とぬと 明く 雨をまくく 小

探歌修羅道

枯蓮尸 起々 残ふ一——くき

日 客 恋 々

園の 夏七 射目を 松の 去る けふ

芦 言き 嵐 子 ゆく むし 全 終 け

腐く 袖乃 枝小 眠ふ や 小 河 雨

病中 吹 悽 吟

う—— 生々 何を 去風 上 守 月

病後

芦の 夏ふ ち 満ち 命 中 玉 何 終

病中 生 生の 庭中 乃 芭 蕉
孟 冬 不 枯 刻 む しく 破 ち ち

芭蕉 夏 中 ち 何 しく 梳 子 机 上 終

さ 夏 東 の ぬ 束 い 終 しく あ しく 一 終

拙 学 愚 蒙 書

言 しく しく 田 園 ま さ 不 一 蒸 の 那

美 所 主 の 候

花 と 舟 人 久 何 て 月 二 ハ 雲 の 候

玉 泉 禪 師 兼 拂 之 時

風 有 ち 有 ち 雲 の 終 しく 枯 庭 不

祇 堂 八 三 十 三 の 玉 泉 中 寺 宗 祇 の 暮 ち ち
雜 賢 の 子 何 して 相 空 と 改 正 宗 祇 の 白 け
可 不 始 ち も さ しく 志 ち 水 の 中 しく ち ち 一 子 ち
終 しく 可 不 ち ち 終 しく 宗 祇 の ち ち 終 しく 終 しく
終 しく 終 しく 終 しく 終 しく 終 しく 終 しく 終 しく

廿二日 方丈より文をよみて紙のやうにうら
空のまがらうに保ちこぼらんやうにそとにきける

冬至

先帝く十一日乃いとやけり

親父は日ふあ

人子不期且き至 衣乃き

江中くま暖を治

小畑くはんとそと

隨とまち流るを松乃き物

雪

初書や何を秘佛れふうう

その書や波のそくうぬ思のそ

常悟さ人を初書 松栞

その書や露とりの人ぬうう

初書まぬ煙とそくうう換換く物

その書神破川と書のワク物

ふぬ寺乃ううや書乃書

ふ摺書の紙墨を清くうぬのゆた

乞所の書たさばや物一の書

玄師あや

書ふ福ふと産はとくうう志いんか

探歌 池雪

かつまきのの暖方戸 雷中横

香門を語ふふ玉門をきき
常くつんとよ梅極は夜のがうとよ

そ水年々そ阿、ら新そる雷の窟

雷日徐安

淀矣別 いくてり之川の橋れ書

右括は云大橋一壺佳致

魚洗ふ朝の富き戸竹の音

顔唐肆 若きそと

破水ひき戸人も嘶 くら書風

独麟 神所の一詩の

二空と出野おとく

隠影くるらう園ハ如 一六つのお

類白境

親ふまきつちおおきハあ 一六つれそ

大まきふ匠おつたふアきけ又まきと略え

くら振ちわの白ハおもふも冬乃月

魚輔 振屋お振るふアきけ

そ飛の流云之川の浦う染冬乃そ

八幡奉納

山上山下郡名二つをこくと

祇ハ久世所 多き綴書新のこけりか

き飛今ハとそし時

新々中 杖を画——富士の山

大坂弁山かく

あ仙の禹王を杖よぬぬの事

日渡尾ゆし

雪をの 老を 母を 妻を 女を

鬼貫追尋よみす
、杖よ十氣兄の詠名佛見と云りハ

兄形是也 佛かろくろ 聖なる経や

延岡大君小なる

威風 田面 日と事 寺と 免殿の松

大林まき納

竹の目乃 ちふふ 寺何く 向田木

輕舟文とふをを圖

漕と免よ 障一 子子 月の川あき

僻玄ハ今 京子 一 五 三 牡丹

いせ人ハと云ひハむしの戯と云へ

空々雨

晴る溜—— 樹を抱く 植もおねか

夕之の君をむく 中—— 炭とふ

あねや 美ふと 所—— 花懐ろ手

歌忠臣

一人新 引とまろ 歌や さよふを

至後

見よりの八宝を物ると毫もさき

宝暎をそとせぬは使小呂典

力雄の白小一枝や 明の室

少

抱し美を風ふそくそ 少うね

宝ふつと暖日多し

織なごはるはるはる 少くは

年忘

伐冷少や 少あそふ乃ふ柏こ

玉情

まき葉のふ小等し 少くは

まき

まねまきし 少くは冷入暖乃月

歌 沖きた

瓢箪とくし 少くはぬかき

暖情

いたくは 少くは 月の夜乃車牛

冬 姪

目よいとくし 少くは まゆく 少くは

病 姪

月見るや 少くは 舞りの白物

家 芦 祝

巧婦し 少くは 花は 雪乃取

右和名たぐま 亦名蘆虎

果実言

御後乃 穉名如きやうし一板が

暁ハハロキヨウホ

冬の女方や 雪の衣もきぬくは

夜まのれれとりのうら 師をうら

小舟も棹もうら おやの波

卵の椀もとや 乃阿う 幸も板

笑うと進めやと の不節言

甲斐殿ふさうハ 困快やの糸

そいの尾や 都の所 ちん狐釣り

行幸や 能小馬が 梅のふ

雷乃 葉の陽も花まの 舟をか

大河阿多橋 阿多花の志り 乃家

悟道院のそ

朝顔の實を干し 緑も 砂を影

とくくつよ人ふき 砂を影 乃廬

梅提て ちん麻 轉よ人 成 蔵 窓

一年を 射る 弓 あり 腰の波

先んじくと 手と 衣 乃 乃 乃 乃

能馬の 御 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

雲 蹴る 鞠ハ空より 年の脚
卯月より 九月より 春ハ空
海幸く 潮 日く せー 昔 想
踏折て 枝 ぬ 交 昔の 海を こり ね
越 次 卯 極る 月 暮る こと 思の まの
はの 困れ うー とも へん 辰 辰の ね
いっ なる 暮 見て 又 寝ん や 辰 辰 階
接つ てる 暮る を 床 辰 やー 人 眺の 日
俣 子 借く 硯も をー の 寫 暮 辰

牛 飛ん くる 氣と 追ふ やー 大 眺 日
擬の 暮 辰 人 訪ん をー の 暮
暮 素 瓜さ 種ハ 也ハ せー 一 辰
塩 飯の けを 窓 小 海を う 柳
かんでん の ちくても 辰の 暮 戸 外
まて 七 柳 暮を 扣く や 車 遊 辰

書 晝 晦

明日ハ 花 針 ち 子 墨 采の 枯 ま 辰

澄々霞夕繪替之部

野馬一疋画ら小

飛やうきんハ此ハ山際を子路約

山を画あるとき居て画したる時かきこる件
又うふいとまげとてハまゝとてなるゆゑ乃
物ぢうんうー後つうまのまじく
又野馬一疋画ら小

木よりしや翠の路行居乃替

唐と柳とを画ら画替

又夕のまゝとて柳と孤山の夕まゝ

富士の山乃 自画替

月と谷田とを山を写す乃

千細の事小陰陰の逢さまふりあうるふ
打翻前斗トそくまて

千は時もねとりは病や浦の杖

あまの陰又付ま序のこく一様はふれう

久した世仔細の杖のこくは序

阿なうる極妙のこくは序はふれと白と
とふ落、宝の親 儂がさかおしと一この
かうゆるはふれまきさうや

李白一斗

詩 百首 花の口乃 おくく寸

宗旦像之賛

樂天元真と唱てえ白と玄序を今一人乃
え向がりて花を屯一暖房小月乃

あふ待付侍一 おちまふらる

小園をく回へは序とそまをそとへは序と
あまそれはわらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうら

よー阿ーのめも一板書 乃 一

小序の画の扉にまてをを編る

仲玉ハ序ハ一 乃 一 乃 一

王宮後村竹の巻

けつ君の玉髪涼一 一 神 一

被れらるるふたのつらやと画一
は身と吟きあまをてくれも

望人を呵ふよを朝の 一 一

松竹の巻

世をハ一ハ 八好きや 一 一

丈竹を本画する契

夕暮乃家老を待た 君うま

布袋の背に稚子を肩かけ
和尙まをを向する一持の儀小

月到天心處地を乳小なりく生乃松

片葉の芽れ後小

此所を不踏まふりりくありの乳

細柳の葉小

空やけ花入り 玄都の物ちくち

松一様子竹の画

寺崎や停観のま風後竹

瓢の口尻に小石を付
山物と早うく

炭二人為之 新衣中 駒の家

薩長中西氏袴の本を并之胸の繪ふ一衣と
漆園之老仙樹と然くくく竹蔭と竹の
禪家の活氣と樹ふ小竹をり中入の
企畫とあま長兮と長

折折小 之願也 袖乃さり ますあ士

石室戸之前小作俳優坂樹と為鬘髮と以手繼
と折して天照大神を慰めたりそのの之をく
是是刻を小神祇のまをさ招一盤端なり人
け人さ時もさるん

面あや いふ老 勢ぬ花とくね

五十而知天命 六十而耳順 七十而
七十は近く勢ぬふをさ藤とも不諭能
いふかふも嘆ふとくし竹のさ

踏るこ後先へ 進むや 福来叶

赤深遠門の絵

匡衡の家人赤深遠の云仁祥友の表文を
吾長人かまふえと云はれ人か

又もてぬや 名もも 草木の秋の香

蕉風夕の極りをむむ時まありけい

正よけ 名目の香極 — 芭蕉の言

同じ白のうんさく交あつるけい新葉の不及
引まもまきくとすむくまき

絵と楊小画ころふ

藤水ぐくく 氏を記はやふ代根竹

之教の画り

あつて冷画 — 後の初みま

梅の絵までよくまきまふ

此ふや 流り 茶ふ 一枚輝

日く是好日

多あらしや 人よハ層 松の風

季あや 若云 四の中の人よくとの松系と
男と女とあふりし流り 松法の性根こり
甲く是ぬらひの中の流り

人丸賛

都ふも かも 山あらし 眉の雪

兼よ 嶽の絵 英一傑の画

山気日夕佳かると云 既新亦已往とつても
また天今とあるのたの

うへ 徒くると 還れよ 喜まそら那

兼とふと斗り 躬恒はよせり

高月樓

惺惺所持

浪

浪華書林

丹波屋傳兵衛板

